

若者の仕事づくりと 働き方・生き方

田中夏子（都留文科大学）



第六分科会は、多方面から、年代も立場も様々な出席者、89名の参加を得て議論が交わされました。これから仕事の世界に足を踏み入れる大学生、現在の職場に悩んでいた、仕事探しに取り組む若い人々、仕事起こしに取り組んだり、それを後方から支援しようとする人々、学校と仕事の世界の橋渡しを模索する教育関係者等、多様な顔ぶれを反映し、広範にわたっての議論展開がこの分科会の特徴でしょう。

また、若者の手で9月に東京の三鷹で立ち上がったばかりのベーカリー『風のすみか』のパンがあっという間に完売。こうした「仕事起こし」の実践例も会場に活気を添えました。

さて、議論の紹介をしていきましょう。まずはコーディネーターの黒沼迪子さんによる開会。長野県ボランティア活動支援センターで仕事をなさってきた黒沼さんは、若い人たちの社会参加の少なさを実感すると口火を切ります。

話題提供のトップバッターは、この春に始動した「ジョブカフェ信州」長野分室の上原進さん（若年者就業支援アドバイザー）。「ジョブカフェでは、三十歳未満の若者の仕事探しを「丸ごとサポート」するため、自立挑戦のための各サービス（情報提供、相談事業、職業紹介）を総合的に提供しています。九月の完全失業率を見ると、4.6%と全体としては改善基調にありますが、若年に限ってみると25歳未満の男性の場合11.2%と跳ね上がります。またこれと並んで「失業者」にもなれないフリーターやニートの存在も際だってきています。白書ではフリーター217万人、ニートは52万人と言われていますが、第一生命のデータでは、2010年にニートが100万人に達するという推計も出されています」と、まずは現状を紹介。

それではこうした現状の背景にあるものは何でしょうか。上原さんは「第一に、国内製造業の空洞化によって雇用の総量が減少していること。国内に残された製造部門は高付加価値分野ですから、即戦力となる技術者に求人が集中し、技術や経験の若者には不利になります。第二には経済のサービス化。サービス業分野で、臨時・短期の雇用形態が広がり、フリーターの吸収源になっています」とし、さらに「これら経済構造の変化を

- コーディネーター 黒沼柚子（長野県体験活動ボランティア活動支援センター）
- 報告者 上原進（ジョブカフェ信州長野分室若年者就業支援アドバイザー）
山本剛（NPOライフワークサポート）
神田光久（労協センター事業団東京中部事業所）
浅野由佳・植木俊介（コミュニティ・ベーカーリー『風のすみか』）
田村光子（NPOじょいんと）
- コメントーター 田中夏子（都留文科大学）

背景として、求職者側の職業観の欠如も若者のとまどいを促進しています。仕事に対する現実的な考え方が持てず、好きな職業にこだわりすぎたり、芸術的な仕事、高度な資格を要する仕事への執着が見られます。また、せっかく働く場を得ても、何か問題があると簡単に辞めてしまう傾向も強まっています。職場に留まって、解決方法を探そうとはせず、離転職によって問題を解決しようとするわけですが、離転職は、より労働条件のきつい場への移動にならざるを得ず、彼らにとって真の解決となりません。

こうした現状を受けて、現在雇用の二極分解が強まっています。例えば大卒の正規社員とフリーターとで生涯賃金の格差をみると2億2,200万円、年金も含めれば、その差は3億円と言われています。お金の面だけではなく、社会保険への未加入で医者にかかれず、健康状態にも差が出てきます。

それでは、どうやって支援体制を組んでいったらよいのでしょうか。上原さんは四つのポイントを挙げました。「まず第一に、就職に必要な力をどうつけていくか。これについては、教育現場、家庭、地域社会や行政、NPO等がネットワークを組み合わせながら、若者も自ら関わって体制づくりが始まりつつあります。第二として、当事者である若者の話をしっかりと聴くことができる仕組みを作るこ

とです。第三に必要なのは、自分と仕事との両者を深く理解する手段として、インターシップや企業見学等、体験の場を豊かに作り出すこと。そして第四は、自分らしい働き方、生活と両立できる働き方をどう作っていくことができるのか、地域に新しい仕事を生み出すという発想も視野に入れて、構想していくことです。

さらに上原さんは、「行政側として仕事をする上で難しい部分もある」としながらも、それをどうやって突破していくかの模索について語ります。「ジョブカフェでカウンセリングに携わっていると手に負えない複雑さがあることを実感します。またニートやフリーター等に、どうやって支援を届けるか、一般的な広報では難しい。そこで対象者の傍らにある人々やNPO(コネクションズ)を介して行政のアプローチを届けるといった工夫が必要になります。またジョブカフェでも「地域キャリアコンサルティング事業」として、カウンセラーの機動的な配置を行い、相談者が足を運ばずとも、相談を受ける側が柔軟に動いていける体制を作りました。相手の声にまず耳を傾け、「不～」のつく否定的な言葉に敏



感に反応していくことが、私たちに求められていると思います。」

上原さんの話を受けて、ジョブ・カフェや自治体とも綿密な連携を取りながら、若者の自立支援に取り組むNPO法人「ライフワークサポート」を主宰する山本剛さんに、現場の声を聴きながら積み上げてきた支援経過を報告していただきました。山本さんはまず錯綜する概念や数値について明確な定義を行い、若者を取り巻く諸問題の整理を行った上で、支援の内実を作るにあたって、長野県内108校の高校の進路指導担当の先生たちに、指導する側の疑問や課題を入念に聴いたと言います。また、イギリスの若年支援体制のあり方を紹介し、支援の柱を「個別対応」「早期退職」「放置しない」の三点にまとめた上で、周りの大人たちが、当事者である若者に対して「「怠け者」という感情論で向き合わないことが重要」としました。

また今秋、山本さんたちが取り組んだ「ニート自立支援講座」を例に、支援する側の働きかけのあり方について、具体的な検討課題も挙げてもらいました。

ジョブ・カフェでカウンセリングを担当しながら、山本さんとともに「ライフワークサポート」を担う西沢暉雄さんは、相談事業を通じて見えてくる若者像をお話くださいました。特に、就職活動前までの学校の学びが、必ずしも自分で選択したものでなく、動機の一部が他律的になっていることを指摘し、「そもそも動機が明確でない勉強の延長に、仕事を描いても、その仕事に参入しようという意欲を生み出すのは難しい」とします。また、たとえ希望の仕事があっても応募しようとしてもそのノウハウがなかったり、人間関係が苦手でなかなか仕事の世界に本格的な踏み

込みができない等の現状紹介もありました。

続く話題提供者は、労働者協同組合センター事業団(東京事業本部)で働く神田光久さん。労働者協同組合とは働く者が出資し、運営し、管理する事業組織です。清掃事業が中心だった職場の中で、神田さんたちは若い層が中心となった「機動班」。歌舞伎町の違法ビラの撤去や夜間の動物死体の処理等、なんでも手がけます。しかしこうした仕事も毎年の入札で他の業者との熾烈な競争に晒され、いつ仕事がなくなるかわからないという事態に追い込まれました。入札の仕事には頼れないという判断から、仕事と併行して職場の仲間とヘルパー講座を受講し、ヘルパーステーション「まめの樹」を立ち上げます。しかしこれで果たして生活を安定させるだけの給料を生み出せるかどうか、依然として不安だと言います。そこで清掃の営業に行った家で介護の仕事も増やしたり、清掃事業も総合的な展開が可能なよう新しい資格を取ったりと、様々な試行錯誤を重ねてきました。

神田さんたちの取り組みの中でも、とりわけ都立の養護学校での、知的障害を持った生徒たちむけの「ヘルパー3級講座」は注目されています。神田さんによれば、「養護学校の先生の話のうちがうと、学校を終えた生徒



のうち就職は二割。そのうち定着は一割。あとの九割は作業所などに通うか家に留まり、卒業後は、生涯にわたって社会との接点が少なくなってしまうとのことでした。その話を聞いて、事務所にもってかえって、障害を持っていても仕事に参加できるよう、就労支援をしていくための取り組みをみんなで考えているところ」とのこと。神田さんは自分たちの職場には「手入れ」-「手入れ」とは、若いメンバーにも責任を委ねつつ、後ろからそれを見守る体勢 - があり、それが、神田さんたち若手が、挑戦的な仕事にも取り組んでいける支えになっていると言います。最後に神田さんは「一緒にやっぴいこうと言えるような職場づくりが目標」と結びました。

会場で好評のうちにあっという間に売り切れたパンの作り手、浅野由佳さん、植木俊介さんからは、コミュニティ・ベーカリー『風のすみか』の立ち上げの報告です。浅野さんは、不登校や社会参加に困難を抱える青年たちが集うNPO法人「文化学習協同ネットワーク」で、学生時代からスタッフとして活動してきました。「この青年たちと、何か新しいことをしたい」と考えた浅野さんは、その実現にむけてワークショップを始め、天然酵母一筋のパン屋さんでのインターンシップ等、「小さなステップ」をたくさん作ったと言います。そうして今年6月、市民からの出資1,000万円を得てパン工房が始動。市民モニターにパンを試食してもらい、商品開発もこなしてきました。浅野さんはその中心に立って、職人さんからの指導を受け、この三ヶ月間、パン焼きに専念。現在は浅野さん含め、四人でパン焼きをこなします。フリースペースコスモでは津久井にある「ニローネ農園」で大豆や麦等を栽培しており、自分た

ちで育てた農産物を使用したパンの商品化も精力的に進められています。また「市民参加の食の仕組み」を作るため、地域通貨の導入もはかりつつあると言います。

一方、植木さんは、少し前まで人材会社で働いていました。『風のすみか』オープンを目前にして、パン工房のスタッフとして急遽参加することを決意し、浅野さんとともに早朝からパン焼きを担いながら、「よい働き方とは何か」を考え求めているところだと言います。

浅野さんは、このパン工房に携わるメンバーの動機は様々でありながらも「自分の存在が否定されることのない働き場」「失敗しながら成長していける場」「自分の働きが自分たちの仕事全体に反映していることが実感できる職場」「地域の人々の顔が見える職場」を求める願いは共通しているとし、「よい働きかた」は、あらかじめモデルがあるものではなく「その追求のプロセスの中から生まれしていくものではないか」と言います。

最後に「千葉大学 仕事起こしプロジェクト」の田村光子さん(NPO法人「じょいんと」理事)から、大学生を中心とした仕事起こしの試みが紹介されました。田村さん自身は、介護福祉専門学校の講師を務めながら、居宅介護や障害者支援事業をおこなうNPO「じょいんと」の理事をこなし、あわせて大学生たちの仕事起こしプロジェクトの支援にも関わるといふ「何足もの草鞋」をはく身で、「八割の労働と二割のNPOや自分の仕事」とをやりくりしながら仕事を組み立ててきました。

千葉大学での取り組みは、田村さんたちが、労働者協同組合でヘルパー事業を手がけていた高成田健さんと意気投合し、また宮本

みち子先生や広井良典先生らとの出会いを経て、徐々に形になってきたといいます。「学生たちは「働くということについて考えたい」という強い思いを持っており、そういう場を求めています。また卒業後、単に働くだけでなく、地域や社会貢献をしていきたいという声も大きかったのです。教室でプロジェクトに興味のある人、と声をかけると、手応えのある反応が返ってきました」。千葉県は、堂本知事によるNPO支援の政策的な流れもあり、制度的にもいろいろな挑戦ができる場であると田村さんは言います。「今、考えているのは、大学生たちが中心となって編集する雑誌、『20歳からのハローワーク』の発刊です」。

ところで田村さんは、先述の「じょいんと」での経験から新しい働き方のイメージについても語ってくださいました。「能力の大小ではなく、個性を生かしあえる場。ひきこもりの人も、ここで「働くことはこんなにおもしろいものなんだ」と、自らの存在意義を感じてもらえる場が「じょいんと」です」。さらに田村さんは、「そうした場で、不治の病の身である青年が、自分の健康状態が危機的な状態である中、病院からはい出てきて、子どもたちの面倒を見ています。「病気だからこない」という発想ではなく、「ゆるやかに、そこに存在し続けることのできる場」が大切です。こうして一緒に考えて、一緒に取り組む場と、そのとりくみを支えてくれる社会が存在する、それが必要なのだと思います」と結びました。

会場からは、十二名の方々から意見や質問が出され、話題提供者からもそれらに答える形で、さらに論点を深めた話が続きました。島根県の荻野さんからは、「ニート」対策も

さることながら、「ニート」を生み出している社会構造そのものへの働きかけの必要性が投げかけられました。上市町の竹川さんからも、過剰な労働と失業という二極分解する現状の中で、ワークシェアリングを進めるにはどうしたらいいのか、といった社会構造を問う疑問が出されました。

若年の就労支援事業を手がけつつあるという花崎さん(滋賀県)からは「相談員やカウンセラーの立場から、職場に順応するだけではない職業人になるためのアドバイスがどうなされているのか」。また、埼玉県の吉原さん、埼玉県の岡崎さん、山梨県の大西さんからは「仕事を起こしたり、NPOで働くことと生計をたてることとの両立」や「労働者としての権利保障」についての質問が出されました。

教育の世界と仕事世界の橋渡しを構想し、県への提言も行ってきた長野県内の乾さんからは、学校、職業社会、地域、行政の連携の必要性が指摘されました。その一例として、長野市の吉原さんからは、ジョブカフェと地域の非営利・事業組織が協同で「仕事起こし講座」に着手しつつある例が紹介されました。

長野県内の笠原さんや山梨県の大田寺さんからは「ジョブカフェに足を運んできかけをつかんだ若者たちが、その後、どんなふうになら方向性をつかんでいくのか」といった質問が、そして東京都の守本さんからは「地域密着」というキーワードが実践的な事業の場でどう具体化されているのかが質問として出されました。

さらに、就職して一年半で現在進退を模索中という若者からは、「自分たちはもうすぐ無職になるかもしれないが、そうやって悩みながら生き方や働き方を考えることが「ニ-

ト」や「フリーター」として分類され、「対策の対象」とされるのは違和感がある」。

また東京の杉村さんは、労働組合を軸として、倒産企業からワーカーズコープを立ち上げた経験から、「人間に合わせた働き方ができる職場になるよう、既存の企業の中からも労働のあり方を変える必要がある」とし、こうした活動に、労働組合を巻き込んでいく必要性が提起されました。

東京都の中川さんからは、イギリスの若者就労支援を現地調査する等してきた研究者の立場から、仕事に恵まれない、あるいは社会からの隔絶が「世代継承」され、格差が次の世代に涉って拡大しつつあること、またそうした状況を打破する際、通常の就職指導のみならず、自分たちで仕事起こしに取り組む流れを作ること、また自分たちの地域社会をよくしたいという関心を育てることが重視されていることが紹介されました。

分科会に参加しながら、感じたことを以下二つで述べて分科会の報告を終えたいと思います。

第一に、「支援」のあり方も極めて手探りであること、支援側の暗中模索や試行錯誤が率直に語られた場だったという点です。支援の形が定式化されていないというのは、逆に多くの可能性を持っていることでもあります。特に、支援メニューを支援側が一方的に決めていくのではなく、「フリーター」や「ニート」と呼ばれる当事者の参加を得て作っていくことが今後はますます必要になってくるかと思えます。

第二は、「当事者の声を大事にする」ことを大前提とした上で、しかし当事者に対して個々に対応するだけでは、議論の中でも出て

いた本質的な部分での「働き方」の見直しにはつながりきらないという点です。過酷な職場に耐えられる「強い個」を作ることが目的ではありません。むしろ、厳しい状況に立たされた時、仲間を作りながらその状況に対応していくことができる、そういう仕事文化を作っていくことが課題となります。

総じて言えば、「若者の仕事づくりと働き方・生き方」と銘打った分科会ではありましたが、最終的には、「若者をどうするか」ではなく、「若い人たちとともに、私たちが自分たちの働き方をどう再構築するのか」という分科会であったように思います。

参加者の感想

・私の子どもも不登校経験があり、「風のすみか」のお二人の発言を大変心強く感じました。行政、NPO（大人からの支援）、若者自身の活動報告、学生時代からNPO活動をされているなど、さまざまな立場の方の発言が聞けてとてもよかったです。特に若者が自然体で自分らしく働く生き方をしている姿を見せていただいて元気が出ました。

